

郷土

創刊号

平成3年3月20日

編集・発行 / 宮本常一記念事業策定審議会
東和町役場



創刊に当たり



宮本常一記念事業
策定審議会会長

東和町長

柳居俊学

宮本常一記念事業策定審議会の会報「郷土」の創刊に当たり、一言ごあいさつを申し上げます。

宮本常一先生は、民俗学の権威としてご高名で、生前は全国津々浦々の離島、農山漁村を实地に踏査研究され、地域文化の向上と発展に精力を注がれました。

とりわけ、本町は先生の出身地でもあり、ご多忙なご研究のかた

わら、たびたびご帰町いただき、全国から見た東和町のあり方について、いろいろとご指導、ご助言をいただきました。

昭和五十一年からの青年を中心とした民俗資料収集保護運動もそのひとつであり、それが、「東和町誌」とその「各論編」の編纂、数万点もの民俗資料を保管展示している瀬戸内民俗館の整備など、今日の東和町の文化財全般にわたる調査研究事業へと結びついたのであります。

また、郷土研究会、郷土大学とその講義に奔走されたほか、本町の離島振興施策とともに、沖家室大橋の実現につきましてもご尽力をいただき、本町の地域文化の向上に多大なる業績を残されたのであります。

先生の理念を継承し

事業を推進

私は、昭和五十六年の東和町長

就任以来、先生のお考えであります「過去を正確に認識し、その過去との連なりである現状の把握に基づいて、将来がいかにあるべきか」の教えを町政に反映させるべく、微力ではありますが、粉骨砕身努力してまいりました。

昭和六十一年九月にスタートいたしました宮本常一記念事業の基本理念は、ただ単に宮本先生の業績を顕彰するためのものではなく、先生の理念を継承し、東和町の発展と町民の幸せを願って行う「地域の振興」として位置づけております。

その理念により、昭和五十九年、町民が一堂に会する場の確保として「東和町総合センター」を建設。これを機に、「何かをやらないか」という町民の総意のもと、東和町ふれあい祭りを企画し、町内の各関係団体からなる実行委員会の組織によって特産品の販売から郷土芸能までいろいろな催しものを行い、町民はもとより町外からも多くの人々が訪れてふれあうことができる、一大イベントとして積極的に取り組んでいるところであります。

また、国民の余暇時間の増大と相まって、本町の恵まれた自然環境を生かしたリゾート整備事業の

推進。優れた研究者や実践者の方をお招きしての座談会や講演会、シンポジウムの開催。都市で活躍されている町出身者の方々との人的、物的交流により地域の活性化を図るための広島、近畿の町人会の設立など数々の事業を推進してまいりました。

町民の連帯感を

「人の減少は恐くない。心の過疎が恐い」といった人がいます。

東和町も依然として過疎化、高齢化が進んでおりますが、それに歯止めをかけるためには、まず町民の連帯感をつくっていくことが大切であり、地域おこしは、「ほかのだれでもない、本当にここを豊かにしていくのは、ここに住む私たちなんだ」という気持を増幅させることを考えます。

その意味で町おこしは、宮本常一記念事業を積極的に推進することによって実現していく必要があると強く確信いたしております。

今後とも、宮本先生の心を心とし、先生と関係の深い皆様方のご指導、ご教導を賜りながら記念事業を推進し、東和町の益々の発展、町民の皆様がご多幸でありますよう祈願いたします、私の創刊のあいさつといたします。



郷土のことは 郷土で

宮本常一記念事業策定審議会
専門部会 会長 米 安 晟

「月日の経つのは早いもの」とは、よく言われる言葉です。昭和五十六年一月三十日、宮本先生が亡くなられ、現在でもう十年を経過したことになります。先生は多

摩美術大学を停年になられて、東和町に帰られました。直ぐに郷土大学を創立し、直接郷土の歴史について講義され、「郷土のことは郷土の地で皆で考え、よい東和町を築こう」と、若い人たちに教えられました。また、真剣に郷土の将来について考えられました。残念なことには、大学設立の一年後亡くなりました。その後、私は、郷土大学を引き継ぐように薦められました。現職のため時間が思うように取れないこともあって、引き受けるとき次のように決心しました。

「郷土大学は宮本先生の志を継ぎ、若い人たちのもり上がった気持ちを結集し、新しい町づくりの実行に入ろう」ということです。幸い郷土大学で教えを受けた人たちが、宮本先生の志を継ぎ、柳居俊学町長を始め多くの人たちが東和町で活躍され現在にいたっています。

その後、柳居町長の発案で宮本常一記念事業策定審議会が生まれ、記念事業をどのようにすればよいのか、検討が進められ現在に至っています。

一口に十年という年月は長いとも短いともいえましよう。しかし、一つの区切りであることは確かです。

す。十年前と現在では、東和町も大きく変わったこともあります。新しい気持で、この記念事業を進めて行きたいと考えている次第です。

新たな気持で 記念事業を推進

事業として、どのようなことを行えばよいのか、これまでもいろいろな意見や考えが出されています。これから審議が進められる訳ですが、宮本先生が具体的にどのようなこと、事業なり、計画なり考えておられたか、振り返ってみますと、私は残念なことに充分伺いませんでした。いろいろ話されたことの中に、離島センターを建設したいということがあります。

宮本先生は大島郡が離島であり、自分がそこで生まれ育ったこともあって、離島の振興に限りない情熱をそそぎ、その功績から、「離島の父」とか「離島の星」と呼ばれているほど島を愛し、全国の離島のために尽力された方です。

橋ができて離島とも言えなくなつた大島ともいえませんが、東和町も他の地域との交流の難しい立地条件であることには、現在も変わりありません。国際化の進んでい

る現在、直接的にはカワイ島との姉妹島として結ばれているなど、東和町も国際的になっています。これからの日本は世界の諸国と結び、国際交流を図らなければなりません。東和町にしても国際交流を図る拠点として、また他の地域との交流の場が必要です。

記念事業の一つとして、離島センターを「国際交流センター」の設立とするのはどうでしょうか。宮本先生は始めに書きましたように、郷土のことは郷土で、郷土の人が考え実行することが大切と言われています。東和町で何が一番大切な、必要かということとは、地元の方が最もよく知っていることであり、この考えを優先しないと必要のないものが出来たのでは、役に立たず利用出来ないことになるからです。専門部会、推進部会で広く地元の意見を聞き、総意で創られるものが一番よいと、私は考えます。私の提案は、話のきつかけとなる原案の一つに過ぎませんが、その海を愛し、郷土を愛し、海外に発展した先祖に限りない尊敬の念を持たれた宮本先生の記念室があれば更によいと思います。創刊にあたり日頃の考えの一端を述べさせて戴きました。以上をもって挨拶といたします。

志を継いで



宮本常一記念事業
推進部会長

新山 玄雄

宮本常一先生がお亡くなりになって十年がたちました。先生のお亡くなりになった日から五日後に生まれたわが愚息も、もう十才の峠をこえました。先生のお名前の一字を頂いて常樹と命名したことを昨日のように覚えています。

その時、郷土大学の機関紙「郷土」に私はこう書きました。

「その郷土づくりに一人でも多くの人が立ち上がり、真に豊かな郷土を作り上げることが学長の鴻恩に答える唯一の道である。学長

の郷土東和町にかけた夢はもはや我々の夢でもある。その夢に向かって、郷土の未来に向かって進んでいきたいと思う。」
いささか気負った、青臭い文ですが、その時の私をふくめた多くの仲間の心情をよく表わしていると思います。

あれから十年たちました。時の流れははやいものです。今、先生がこの町にいらしたら、現在の町をご覧になって何といわれるだろうと時おり考えます。教え子の多くは今、町づくりの中堅として活躍しています。その中の一人は町長に、そして私は議長という役割りをになうことになりました。宮本常一記念事業も開始、さまざまなことに取り組んできました。このような機関紙も発行出来るようになりました。

懸命に努力してきたつもりはありますが、やはり、先生のお目玉をくらいそうです。「いや、これはちがうよ。」といわれそうです。

やさしい笑顔でいつも囲りの人をあたたくつつみこむ先生でしたが、時おり厳しい一面もお見せになることもありました。

そう思ったり、あの笑顔で「まあ、ぼちぼちいったらええんじゃ。あせらず、気長にやれることをやったらええんじゃ。」と言って下さるような気がします。

私が地域活動に本腰を入れて取り組みようになったのはやはり宮本先生との出会いがあったからです。「大事なことは規格化されることではなくて、みんなが企画し、お互いがお互いに発見していくことである。その発見していく一番大事なものとなることは何であるかという、やはり自分が今住んでいる場を、その生活の場をもとにしてその中から新しい生き方を見つけていくことです。」という宮本先生の考え方に心から共鳴したからです。

ところが、現実はいさびしい。先生の言われるお互いが企画していくよりも、規格化される力の方が強い場合がよくあります。現実の厳しいカベにも何度かぶちあたりました。しかし、本当に地域やそこに住む人が豊かに、幸せになつてゆくには、規格化にまけない、カベを乗り越えていく方法と力を

もつことだと思えます。

先生は晩年、「自伝抄―二ノ橋界限―」（中国新聞連載）の末尾にこう書かれています。

「民俗調査の旅をはじめ今年でちょうど四十年になる。しかし私のかかえこんでいる問題は何か一つ解決の方途すら見いだせていない。しかももう体力がなくなつて仲間とともにミカンを植えたり、柿を植えたり、栗を植えたりする力を失っている。」

いま一番さびしく思うことは農民たちのかかえているもろもろの問題を、外側からではなく、内側から見ようとする人がほとんどいなくなつたことである。

残存する民俗を比較研究することともよい。しかし何がどのようにしてほろび、何がどんな形で残っているのか、そしてそれはなぜなのか。それをほんとうに理解し得る者は、その地の生活体験者である。―中略― 道ははてしなく遠い。」

もろもろの問題を内側から見ることに、この郷土の生活を通じて解決してゆくこと―この「郷土」の発行と記念事業の推進が、その見る目を育て、解決の一步をふみだすものとなることを心より願っています。

宮本先生とは

先生をよりよく
知ってもらうために

西村 与一

昭和三十三年に私は佐渡に渡り

ました。相川の宿で、近くの世話仲間に入れて貰い私が山口県出身だと言うと、話題が宮本先生中心の内容に移りしばらくは、それ迄の道路問題そっちのけの話が続きました。お話によると、先生に何度も来て貰っている間に、村人は特に積極的となり全体に今迄になく活気が見られる様に感じられてきたと、心から有難がって話すのでした。私は先生がよく歩かれる事は知っていましたが、こんな人々に感銘を与える旅であったのかと、はじめて知りました。

又十数年以前に、堺浜学校の同僚四人と隠岐へ向かった折、境港からの船中で西郷に帰る役場務めのKさんと同席した時、隠岐での見所を尋ねたりしているうち、宮本先生の話が出て、先生に指導に来島して戴いてからは町の人達も新しき芽が息吹いてきた様に思

うと、先生への感謝の気持を一杯に現わして話すのでした。我々が宿に入っていると、役場から来たよと言つて若い人が、町関係のパンフレットや町に伝わる踊りを見てくれと踊り手三人を連れてのサービスに私達は改めて先生の島民への影響の大きさに驚きもし感謝したのでした。

その時ふと私は他郷の地に先生は、こんなに力を入れていっているのが東和町へ、もっと積極的な指導が欲しいなと感じたのでしたが之は全く杞憂であつたと時を経るに従つてわかつてきたのでした。

先生が全国を廻る事により大きな問題を持ち、解決の方策を思考し続ける一方で、わが東和町はどうあるべきかを模索し、確固たる基盤が着々と整えられていたのでした。郷土大学の開設を初め、本誌記載の数多くの業績がそれを如実に現わしています。

皆さんお願いです。本誌によって先生のプロフィールはじめ先生の足跡から宮本常一記念事業推進の基本理念等々をくまなく吸収理解され、本会に賛同の上町発展のために各自持てる力をそれぞれの立場に応じて十分発揮できるように

努力を重ねて下さい。

尚本会から発行された「夢と情熱」や更に郷土大学講義の総まとめとも言える「郷土の歴史とは何か」にも重ねて目を通し宮本常一像の把握と郷土を再認識新しい生き方をつかんで欲しいと思います。

さて、私は先生と瀬戸内の島巡りの旅に同道させて戴きました。下田から乗船、倉橋島を皮切りに蒲刈、伯方、生口等々定期便を乗り継いでの一週間の旅でした。勿論先生の旅の真意などつかめるはずもなかったのですが、私には旅の面白さ即ち未知の土地や人と直接接触し、交流する楽しさを多少はつかめた旅で、八十歳近い今も心に残り一年に数回はこの楽しみを続けています。

先生のことを少しずつわかるにつけ、何故もっと早くこの人につかかってゆかなかつたのか。誘われた越後の旅や済州島の調査などをお断りした事が悔やまれてなりません。

意外に早かった先生の早世が残念でなりません。故郷に還ってきている今、先生の残された著書にできるだけ多く接して、皆さんと共に町おこしに少しでも努力しようと思つています。

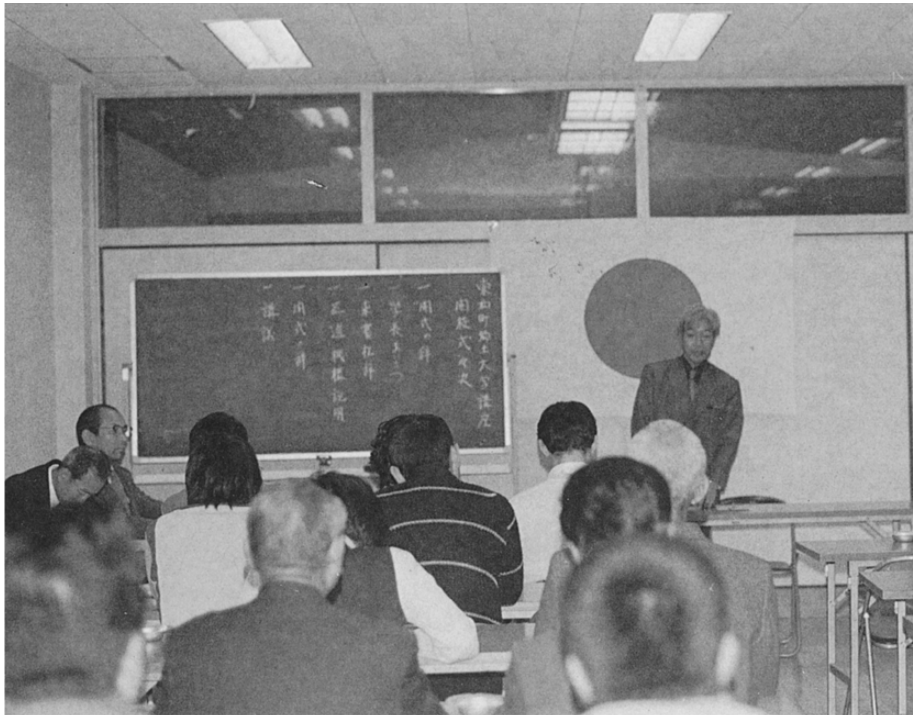
この十年を
振り返って

郷土大学事務局長

中本 健雄

昭和五十五年三月二十五日郷土大学の第一回講義が宮本学長により始まり、第十八回講義の後昭和五十六年一月宮本学長がお亡くなりになり、二代目米安晟学長に引き継がれ十一年が経過しました。宮本学長の「認識を深め、教養を高くし、これを実践し、郷土をここに住む人々の理想の世界にしていこう」の理念のもと舛重正一先生、永六輔先生始め多くの先生方の講義を受講しました。

この間、二回の郷土大学祭には「鼓童」の二回の出演、「周防猿回しの会」「土佐源氏」の坂本長利さんの出演、日本生活学会のサマーセミナーの開催等行いました。その後休校状態になっていましたが、先生が蒔いてくださった種は芽が出、東和町はいろいろな可能性に向けて動きだしています。これからも多くの先生方の講義を受講し、皆様とともに建学の理想に基づいて頑張っていけたらと思つています。



▲ 郷土大学の開校式で講演される宮本常一先生（昭和 55 年 3 月 25 日，森・東和町自然休養村管理センターにて）

郷土大学

郷土大学は「郷土にいて郷土に学び同時に郷土で学ぶこと」によって深い思索と広い視野を持ち、今後の郷土が如何にあるべきか、われらは何をなすべきかを学習する機会と機関」であり、「今後の郷土のあるべき姿をさぐり、これを実現しようとすることを目的とするもの」（宮本常一）です。

郷土を愛し、その現状と将来を憂えるものにとってこの提言は、まさに干天の慈雨のようでした。

昭和五十五年三月に開校。しかし、一年を経ずして大学の提唱者であり、指導者であった宮本学長が逝去されました。そのショックは大きなものがありました。その志を継いで副学長であった米安晟先生が二代学長に就任され、現在にいたっています。

宮本学長のまかれた種がどれほど発芽し成長したのでしょうか。お互いに考えてみたいものです。

宮本先生の「ことば」と記念事業の基本理念

● 基本理念…宮本常一記念事業は、ただ単に宮本先生の業績を顕彰するためだけではなく、宮本先生の理念を継承することによって東和町の発展と町民の幸せを願って行うものです。

先生の貴重な「ことば」は、非常にたくさんあり、郷土大学の講義で、特に貴重なことばを披露して、先生の理念の紹介とします。



（第一回講義）、学問という

周防猿まわしの演技で場内大爆笑。



昭和五十五年、五十六年の二回にわたり郷土大学祭を開催しました。初回は十二月二十三日、油田小・中学校の体育館で、周防猿ま

郷土大学祭

鬼太鼓座や 周防猿まわしでにぎわう

わしの会と佐渡の鬼太鼓座を招いて開かれ、大好評のうちに終了することが出来ました。初めての取り組みでしたが、運営委員、学生、青年団をはじめ関係者の熱意はさまざまのものがあがり、ついに総勢二千名近い人が参加する大規模なものになりました。

公演は、昼夜一回づつ計二回行われ、昼の部は町内小中高校の全生徒を招待、夜の部を一般客にあてました。

郷土大学からは一週間前に急きょ編成された「へんてこ座」がふんどし姿で太鼓を叩き、会場をリラックスさせ、つぎに周防猿まわ

しの会のユーモラスな演技に会場は大爆笑。そして鬼太鼓座の太鼓はすさまじい迫力と緊張感で参加者を魅了しました。

翌年は、名称を鬼太鼓座から鼓童と変えて再び出場、坂本長利さんの「土佐源氏」による大学祭でした。町内の生徒・児童のポスター（テーマは未来の東和町）も会場に掲示しました。会場は東和中学校体育館でした。

この祭りが後のふれあい祭りや東和陸奥太鼓の結成などに大きな影響を及ぼすことになり、いろんな分野でその波紋が広がったと思います。



▲勇壮な鬼太鼓座の音が場内に響きわたる。

のは、すべて発見だと思えます。発見が重なっていくことによって、おのずから全体の姿が見えてくるのです。

（第二回講義） 過去は過去でなく、そのまま現在である。現在の我々の中にあるもの、そこから過去がどのようになっているかを見いだすこと、それが本当の歴史です。

（第三回講義） 歴史を理解すること、この町がいかにあるべきか、何が変わらないか、何がこの土地のしんになっているか、それがわかってきます。

（第四回講義） 我々が気づいていない間に、民衆が民衆の自覚によって、自らの住みよい社会を作るように努力していったのです。

（第五回講義） 我々の生活の基本にあるものは、人間が作り上げていった努力が権利化され、どのように一人ひとりの所有形態になつていったかで、それが今日までの我々の歩いてきた道筋です。

（8ページの最下段に続く。）

記念事業の 取り組み



昭和六十二年八月二十六日、顧問の先生や専門委員の先生方にご参集いただいて開催された 専門委員会

宮本常一記念事業は、昭和六十一年三月、宮本常一先生の名誉町民称号の追贈を契機として同年九月スタートし、宮本常一記念事業策定審議会（会長、柳居町長）が設置されました。昭和六十二年三月には、町内のメンバーで構成された策定審議会推進部会が発足。さらに同年八月には、宮本先生に深く関わってこられた先生方を中心とした専門部会も結成されました。宮本常一記念事業は町のソフト事業というべきもので、座談会、シンポジウム等の開催や出版、講演会等の事業に取り組んでいます。

宮本常一記念事業は、ただ単に宮本先生の業績を顕彰するためのものではなく、宮本先生の理念を継承することによって東和町の発展と町民の幸せを願って行うものです。

（六ページからの引用）



▶ 昭和六十二年三月二十六日、推進部会の初会合が東和町公民館で開かれた。

前ページからのつづき

（第六回講義）我々は、古いことから絶縁したように思っているが、実はそうでなく、古いことがお互いの中に無意識に生きていて、我々の生活を左右しているのです。

（第七回講義）我々が気がつかないところで背負っている運命を明らかにし、その自覚を持たないかぎり、この土地を本当に新しくいきいきさせていくことが出来ないのではないか。

（第八回講義）どうすれば平和が得られるかということも、多くの人の長い体験の中からわらだしていったもので、その背後には学問による意志の通ずる世界が作られていたのです。以上

郷土大学の講義にすぐれた研究者や実践者に来町してもらったため、先生が書かれた依頼文「お願いのこと」を紹介します。

お願いのこと

このたび有志集りまして東和町郷土大学講座を開設することを計画いたしました。



▲ 昭和63年7月 総合センターで行われた広島町人会との交流。

昭和62年11月 ふれあい祭りの前日開催された ふるさとづくり座談会 中央に宮本先生の指導で制作された地形図を展示。▼



▼ 平成2年9月 サザン・セト なぎさシンポジウムを開催。 地元から350人が参加して盛大に行われた。



平成元年11月「産業づくりと人づくり」と題したふるさとづくりシンポジウムを開催。▼



その目的とするところは、郷土にいて郷土のことを学びまた、郷土を通じて広く文化社会経済歴史などについての認識を深め教育を高くし、これを実践し郷土をここに住む人々の理想の世界にしてゆこうとすることにあります。

そして講師は、郷土出身の学者教養人あるいは郷土に関係のある知識人を招きたいと思いますが、わざわざ招くのでは大変な費用を要しますので帰郷の際あるいは大島郡の近くを通過の際立ち寄っていただいて聞くことにしたいと思います。

従って不定期になりますが、年間三十日(六十時間位)の講義を開くことができるようにししかも長く続けてゆきたいと思えます。

それでも相当費用もかかりますので聴講者から聴講料も取りますが、運営費は郷土在住または郷土出身の有志の御寄附を仰ぎ、どこまでも自主的に運営してゆきたいと思えますと同時に講義内容も立派なものにしたいと思えます。

この主旨に御賛同いただきまして、よろしく御協力のほど願います。

東和町郷土大学

学長 宮本 常一

宮本先生と私

投稿文
の紹介



離島センター
調査研究部部長
大見重雄



東京農業大学教授
舩重正一

私が宮本先生に初めてお会いしたのは、安下庄高等学校に入学した昭和二十八年のことであった。数えてみると早三十八年も経つ

宮本先生は、私にとって最大の恩師であり、尊敬する人です。その理由はいくらもありますが、最大の理由は、立派な民俗学者で離島研究の第一人者であるということです。

ことになる。たまたま、その年に長男の千春君が同ジクラスにいたことが邂逅のご縁であった。最も多感な頃の出会であるから、うかがうことの全てが新鮮で、大島郡の外の世界に夢を馳せたことであつた。そして以後の私の人生の殆どの部分は先生に決定して頂いたと云って過言ではない。(以下次頁へ続く)

人物評価の基準に著書があるか否か、その内容と冊数はということにこだわる私にとっては、著書数百冊近くを数える宮本先生は、もうそのことだけで超人的な神様のような人です。その著書のほとんどすべては我が国農山漁村で、たくましく生き書いている庶民の労働と暮らしの実情を地といわれる山奥や離島地域を対象にしたものが多く、特に離島に関する研究はその幅の広さと奥行の深さで宮本先生に比肩する人は

未だ誰一人もいませんし、当分それらしき人は見当りません。

さて、私と宮本先生の出会いは、今から三十四年前の昭和三十一年の秋、東京農大三年生の時、恩師高松圭吉先生の指導で神奈川県荻野村へ林業経営実態調査に参加した時です。

それが機縁となって昭和三十三年春、私は今の職場である全国離島振興協議会に男子職員の第一号採用者として先生の推せんで就職することができ、以来、今日まで勤めているわけがあります。

従いまして私は就職時から宮本先生が昭和五十六年に逝去されるまでの二十三年間、想えば尽きない数々の事象がありますが、残念ながら与えられた紙数ではとてもその一端すら披露する余裕はありません。

ともかく私は先生には大変お世話になり可愛がられました。何十回もの講演や何百回になるかもしれないいろいろな会合でたくさんのお話を聞き、何回かの説教も受けてました。

もちろん先生の書いた本は全部読破しました。

また、昭和三十八年六月から昭和四十九年四月までの間、先生主

★

★

★

★

★

★

催の同人クラブ「デクノボウ」の世話役を引き受け、この間同人誌七十五号(冊)を刊行致しました。私はこうして島を見る目、社会を考える方法を永年にわたり少づつ宮本先生から習得教授されることにより、人間的な個性を練磨することができたと感謝しています。

ところで本年は宮本先生没後十年の節目の歳です。

東和町の皆さん、この期に念願の宮本記念事業を確実に前進させ、何か具体的事業としては是非実現するようにしてください。

宮本先生は学界で離島振興を支えた第一人者です。東和町民・大島住民はもとより、全国の宮本ファンや若者後継者の励みとして、その功績は永久に顕彰すべきではないでしょうか。

特に今地方では自立自興、ふるさと創生運動による郷土振興が叫ばれている時でもあります。

郷里の生んだ偉大な民俗学者宮本先生をテコとして生かし、東和町の町おこしの起爆剤にされまことを念じ、東和町民の皆さんの意欲的な支援と多くの宮本ファン同志の善意と協力を期待してやまない次第であります。

その最も大きいものは研究者への道であつたらう。

私は昭和三十一年に高校を卒業し、百姓を手伝いながら受験勉強をして三十三年に東京農大に入學、更に大学院の修士課程にまで進むことができたが、これらはすべて先生に周囲の環境を整えて頂いたお陰であつた。当時はまだ大学にいくものさえない時代で、古風であつた私の父は大反対であつたが、先生が説得して下さつて道が

開けたのである。

宮本先生が旅の達人であつたことはよく知られている。しかし、私が最も感銘しているのは、無数の人々に会われながらしかもその方々のことを、人生歴と共に記憶されていたことであつた。普通に生きたであろうこれらの人々について先生が語られるとき、その人は私にとりいつも偉人に昇華されていた。

私は子供の頃、停まっているバ

スに乗っても酔う程に乗り物には弱かつた。それが今日では東南アジア諸国に対する研究教育援助の仕事のためにタイ、インドネシア、フィリピン等を飛び回つても平気になつた。先生がご存命であつたら何といつて下さるであろうか。発展途上国の人々に対する対処（援助）の仕方についても有効な示唆を頂けたであろうと、追慕の念しきりである。

先生はよく故郷を糧にして育つ

たことを忘れるなどいわれた。そして、出来るだけ故郷に帰りその分だけ還元せよとも。私は少なくとも帰郷することについてだけは先生の言を守っている心算である。しかし、故郷に対して尽くせているかとなると、反省の限りである。我ら東和町人は偉大なる先達を持った。そのことを誇りに思い、宮本先生が故郷に馳せた夢を忘れてはならないと思う。

旅から生まれた

二つの視点

テム研究所所長

真島 俊一

私が武蔵野美術大学建築学科四年生の時、先生に出会う。昭和四十五年の初夏であつた。先生の語り口に魅力を感じた。ほどなく旅に随行するようになった。

車窓からの風景を指し、それが何を意味するものか語り続けた。川や台地の形状、田、畑の形、樹林、民家の特長などを示しながら地域の生きる姿、特質を克明に言い当てていく。地域の生活文化が

何を示しているか。発見し、評価していく方法を私に伝えていたのである。さらに地域の振興は、この上に立つて行うことだとも具体的な例を示し語ってくれた。

旅に同行することに様々な事象が私の中に積もりはじめた。人々が見忘れ見落していることを掘り起こすことや地域の良さ、特長を啓発（振興）し続けることも大切な仕事なのだと言動で知らせて下さつた。

卒業後の私は、就職はせず、アルバイト稼ぎでふらりと旅を続けることにした。つまり、地域の生活文化を徹底して学ぶつもりになつたのである。あまりにも無知だったからである。学生の時から手をつけていた佐渡郡小木町の琴浦

村、宿根木村という二つの村に入り浸つた。村で見て、聞いて、体験したことは総て初めてのことばかりであつた。調べ、整理し、数年たつたが、多様な事象に迷うようになった。先生は「あわてることはない。そのうち、一つ一つ繋がりがまとまってくる。一つの村の生活の総てを知ることができたらすこい。そこに日本の生活文化の構造があるのだから。」と語って下さるのである。

佐渡での体験学習的調査研究を十年も続けると、対象は広がっていった。民家の間取りや集落の間構造から始めた調査は、道具や民具などの物質文化や、そこに暮す村人やその生業と生活、歴史、環境全体に渡るものになつてい

た。宿根木村の住職である林道明先生の民俗博物館造りにも参加し、島人の語る村や町の将来像造りに魅力を抱き始めるまでになつた。佐渡ヶ島から学んだことは多かった。琴浦村は、そこが漁村であつたことから、男が海、女が山、（台地上の耕地）へという分業分担の面白さがあつた。漁具、漁法村の組織、海流や海底地形と魚族の生態、季節の動きなど、海辺の村の特長を体で知ることができた。

宿根木村は、かつて廻船稼ぎの集落であつたことから、和船の航海技術や造船の方法、道具、船大工の活動、海運経済史などへと視点は広がり、日本史の中の村の動きに注目するようになった。又、

（12ページ上段へ続く）

小木町の民家の生活に桶が多用されていることから、桶の使い方や造り方にも興味を持ち、味噌、酒造業といった産業の形態にも視点が移っていた。

佐渡金山の調査からは鉱石と地質の関係、鉱山技術や工具、分業制度の特異性に目を見張った。鉱山町の構成や町屋の暮し、さらには、工人達の全国渡り歩きの活動などにも興が乗っていた。佐渡金山の観光事業のあり方にも提言し調査、研究を生かして計画を実施し、コンピュータロボットの工人群を説明役とする坑道観光の方式を実行してみた。等々……。

私の佐渡ヶ島体験行動は、拡がるばかりになっていったのである。そのあげくには、島ばかり見ていたのでは島の姿は分らないと考え、全国和船調査と名付け、日本の沿岸各地を歩き始めることになる。中古車に寝泊りしての和船探しの旅である。全国各地で同学の志を持つ知友に出合うことにもなっていた。

村の民家や集落を学ぶことから始まった私の旅は、生活文化の構造や産業史、民具や木の文化などの特質を学び始めることになっていく。こうして資料の山を作ってしまったのであるが、先生が語り続

けた「一つ一つまとめだ」という約束は、まだ少ししか果していない。大反省……である。

一方、調査研究が進むにつれて、設計者としての私の視点も変わっていった。地域が生き生きする活動や計画は何がいいかと思ひ始める。地域が何を求めているか知る力も私には必要になっていった。計画や設計は、人のための器だから、人の活動し易い仕掛けも作らねばならないと考え仕事を進めていく。すると仕事の境目はなくなりこれも広がり始めた。多種多様なおつきあいも続くことになった。このように、計画者と研究者の二つの視点を持って私が活動するようになった所以は、宮本先生との出会いにあるのである。そして二十一年経った今も変わらず、島人との交流は続いている。

今後一つ一つ確実に複眼流でまとめたいこうと考える今日この頃なのである。

委員の紹介

(敬称略)

★会長

○東和町長

柳居 俊学

★顧問

○防衛大学教授

山階 芳正

○生活学会理事長

川添 登

○離島センター専務理事

児玉 義幸

○相模女子大学教授

高松 圭吉

★専門部会

○部会長 東京農業大学教授

米安 晟

○離島センター調査研究部長

大見 重雄

○武蔵野美術大学教授

田村善次郎

○テム研究所所長

真島 俊一

○東京農業大学教授

舛重 正一

★推進部会

○部会長 町議会議長

新山 玄雄

○町農協組合長

村田 幸雄

○町漁協組合長

風呂川盛勝

○町商工会会長

秋元 敏雅

○町婦人会会長

鎌田美代子

○町老人クラブ会長

西村 与一

○郷土大学事務局長

中本 健雄

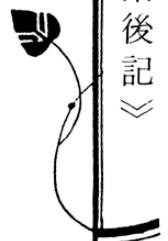
○町助役

空 席

○町経済観光課長

竹本 正博

《編集後記》



会報「郷土」をお届けいたします。宮本先生が余りに偉大すぎ、どういふ内容で編集してよいか、編集委員一同、思いを巡らせました。そして、やっと今回発行にこぎつけることができました。

郷里を愛し、郷土とは何であるかを説き続けてこられた宮本常一先生。その先生は今亡き、今更ながらその足跡が忍ばれます。

今、東和町は、過疎、高齢化等厳しい現実と直面しています。

題名の「郷土」は、以前自らが創設され、初代学長を務められた「郷土大学」から郷土を拝借し、名付けたところです。宮本常一記念事業策定審議会の委員の先生方より貴重なエピソードもお聞きすることができ、感謝いたしております。ありがとうございます。

この「郷土」は、宮本先生ゆかりの皆様はじめ、町内各世帯へ配布いたしました。

第一回で私どもの意とするとところを十分に言い尽くせませんが、気付等ありましたら事務局（企画課）へご連絡いただければ幸いです。

